教育センター通信

火床（ほど）の火の心を紡ぐ

第８号（通算第４７号）
平成２９年１２月２０日
三条市小中一貫教育推進課
教育センター　発行

しただの郷学園
乗り入れ授業（英語）の様子
１２月８日　大浦小学校

「本当に一人前の教師」とは

教育センター　指導主事　武井　正明

春以来、実にたくさんの学校から温かくお迎えいただき、多くの先生方の授業を参観させていただきました。オーダーメイド訪問を校内研修の中核に据えていただき、毎月のように公開授業をしてくださった学校もあります。必要としていただけること、心より感謝しております。

今秋、オーダーメイド訪問で、ある小学校の国語「海のいのち」の授業を参観させていただく機会を得ました。中学生対象でも十分に授業になる、かなり難しい作品です。たくさん出てくるであろう疑問点を、どんなふうにして解決していくのか、とても興味深く参観に臨みました。

沈黙を怖がらない、考える時間の多い授業でした。授業者の先生は、余計な言葉を抑えて、落ち着いた語り口で子どもたちの反応を見ながら、授業を進めます。子どもたちの頭の中が、めまぐるしく思考しているのが伝わります。発問に対して、それぞれが一斉に本文に立ち返ります。鉛筆が走ります。思わず参観者まで授業に入り込んでしまいました。授業の中盤、「本当の一人前の漁師」とは？「村一番の漁師」とは？えっ？何が違うの？で子どもたちは迷い出しました。（参観者も、授業者も迷いました。）そして互いの意見を交換して、授業は終わりました。誠実な、次時につながる、素晴らしい授業であり、「一人前」という言葉の解釈がカギとなる授業でした。

教育センターに戻る車中、ふと思いました。教師も漁師も「一人前」って難しいな、と。「本当の一人前の教師」を「本当にいい先生」と置き換えるとよいかもしれません。

「海のいのち」の漁師と違うのは、教師が世の中からオールラウンドを求められすぎて、「いい先生」の基準があまりにも多岐にわたっていることです。「一つくらいじゃダメだ。今の時代の先生は何でもやってもらわないと…」ということなのでしょうか。

三条市内の先生方、皆さんいろいろな事情を抱えながらも、それぞれが、一日一日をひたむきに頑張っておられます。求められることの多い毎日です。様々な仕事と並行して行われる、何よりも教師の本分である「授業」を「ちょっとひと工夫」の精神で、少しでも、よりいいものにしていきたい。そのためにわずかでも力になれるように、教育センター指導主事も精一杯の支援をさせていただきます。

ピックアップ

学園小中一貫教育推進協議会の取組

～地域とともにある学校づくりの推進に向けて～

「三条おおじま学園」「さかえ学園」の各小中学校７校が、今年度からコミュニティ・スクール（以下ＣＳ）となり、本格的に「地域とともにある学校づくり」の取組を始めております。これらの取組の成果と課題については、便りやリーフレットでの周知及びコミュニティ・スクール研修会等での説明をさせていただく予定でおります。

いずれはこの仕組みを三条市の全ての学校・学園に広げていきたいと考えておりますが、幾つかの学園では、コミュニティ・スクール導入に向けて、今年度試行的な取組を行っていらっしゃいました。三条学園、一ノ木戸ポプラ学園、瑞穂学園、しただの郷学園の取組を紹介します。

＜三条学園＞グループ協議
「学校と地域が一緒に考える三条学園のコミュニティ・スクール」について熱心な話し合いがなされました。

＜一ノ木戸ポプラ学園＞　グループ協議
「まなび」、「こころ」、「からだ」、「ちいき」、「評価広報」の５部会巡回ファシリテーション形式で意見交換が行われました。

＜瑞穂学園＞　車座トーク「地域との連携を図りながら『眠育』を進めるための取組について」（地域懇談会）家庭や地域の役割について、活発な意見交換が行われました。

＜しただの郷学園＞　　グループ協議
「しただの郷学園の目指すコミュニティ・スクールとは？」　地域の方々の子どもたちの教育に寄せる強い思いを感じました。

「特別支援サポーター」の役割

教育センター　統括指導主事　大西　聡子

市内小中学校の全児童生徒数が少しずつ減少している中、特別な教育的支援が必要な児童生徒は年々増加する傾向にあります。伴って特別支援学級数も増加しており、昨年度は 66 学級でしたが今年度は 71 学級になり、来年度はさらに増加の見込みです。また、通常学級の児童生徒のうち、学習や生活の面で特別な支援が必要な児童生徒が、約６％程度の割合で存在する可能性があり（文部科学省調査）、これらの児童生徒に対して適切な対応が求められています。加えて、特別な支援が必要な児童生徒の障がいなどの状態は多様化しています。

各校で特別支援教育の充実を図っていただいているところですが、担任のマンパワーだけでは十分な指導が難しい場合もあります。学校訪問の際に、「特別支援サポーターのおかげで支援の必要な児童生徒が落ち着いて学習に取り組んでいます。」「特別支援サポーター数が増えるとありがたいです。」という声をいただきます。三条市では、現在 67 人の特別支援サポーター（以下、サポーター）が市内小中学校で勤務しています。三条市の児童生徒の成長のために、本当に真摯にお取り組みいただいています。担任の先生方とともに、児童生徒に寄り添った支援をしていただいているサポーターの存在は大きいと感じます。学校にとって大きな力となっているサポーターを最大限に活用し、サポーターの皆さんに力を発揮していただきたいと思います。

次に、文部科学省から示されている「特別支援教育支援員の具体的な役割（H19.6）」を紹介します。一部抜粋ですので、文部科学省のＨＰを参照してください。

主な役割	具体的な支援・介助
１　基本的生活習慣確立のための日常生活上の介助	自分で食べることが難しい児童生徒の食事の介助をする。また、必要に応じて身支度の手伝い、食べこぼしの始末をする。など
２　発達障害の児童生徒に対する学習支援	教室を飛び出して行く児童生徒に対して、安全確保や居場所の確認を行う。など
３　学習活動、教室間移動等における介助	車いすの児童生徒が、学習の場所を移動する際に、必要に応じて車いすを押す。など
４　児童生徒の健康・安全確保関係	視覚障害のある児童生徒の場合、体育の授業や図工、家庭科の実技を伴う場面（特にカッターナイフや包丁、火などを使う場面）で介助に入り、安全面の確保を行う。など
５　運動会（体育大会）、学習発表会、修学旅行等の学校行事における介助	視覚障害のある児童生徒に対し、運動会で長距離走のとき、一本のひもをお互いに持って同じペースで走って進行方向を示したり、学習発表会では舞台の袖に待機し、舞台から落ちないように見守る。など
６　周囲の児童生徒の障害理解促進	支援を必要とする児童生徒に対する、友達としてできる支援や適切な接し方を、担任と協力しながら周囲の児童生徒に伝える。など

最後に、サポーターの皆さんが一生懸命に取り組まれている一端を紹介します。

＜A 小学校の教頭先生から＞B サポーターは、児童の成長を本気になって考えています。個々の児童にとって本当に必要な支援が何かを考え、必要以上の支援をせず、時には少し距離を置いて温かく見守りをするなど適切な支援をしています。

＜C 小学校の校長先生から＞D サポーターは、保護者との信頼関係を上手く築いています。保護者からの情報を担任に伝え担当者で共有することで、それぞれの児童に応じた適切な指導・支援につなげることができています。

＜E 中学校の教頭先生から＞F サポーターは、生徒の状況をよく把握しています。そのため、「個別の指導計画」を作成するための校内委員会に参加してもらっています。F サポーターによる日頃の見取りによる生徒の特性や状況を参考にすることで適切な計画を立てることができます。

校内の特別支援教育を進める上で、特別支援サポーターの担うところは大きいと思います。今後も教職員と特別支援サポーターの連携をしっかりと行うことや特別支援サポーターの力を発揮する場の設定により、児童生徒一人一人の成長につながる指導・支援、特別支援教育の充実をお願いします。

「三条学講座」受講、ありがとうございました　！

今年度の三条学講座が終了しました。直接“三条のひと・もの・こと”に触れることで得られた感動を多く寄せていただきました。皆様のご理解ご協力に感謝します。

H29 年度「三条学講座」受講者数（人）　※(　)内は H28 年度

回	講座名(略称)	小学校	中学校	合　計
1	郷土の偉人 諸橋轍次博士	5（5）	2（2）	7（7）
2	包丁研ぎ講座	37(42)	19(12)	56(54)
3	和釘づくり講座	20(16)	2（2）	22(18)
4	三条鍛冶の歴史(ルーツ)	3（7）	5（2）	8（9）
5	三条刃物について	10(10)	2（1）	12(11)
6	秋の大崎山をたずねて	6（6）	2（1）	8（7）
7	包丁づくり実技講座	8（12）	3（0）	11(12)
合　計		89(93)	35(20)	124(113)